日蓮大聖人御書全集

富木殿御書（ときどのごしょ）

（止暇断眠御書（しかだんみんごしょ））

新版1322～1324

富木殿御書（止暇断眠御書）

建治3年('77)8月23日　56歳　富木常忍

妙法蓮華経の第二に云わく「もし人信ぜずして、この経を毀謗せば、経を読誦し書持することあらん者を見て、軽賤憎嫉して、結恨を懐かん。その人は命終して、阿鼻獄に入らん乃至かくのごとく展転して、無数劫に至らん」。第七に云わく「千劫、阿鼻地獄においてす」。第三に云わく「三千塵点」。第六に云わく「五百塵点劫」等云々。涅槃経に云わく「悪象に殺されては三悪に至らず、悪友に殺され

ては必ず三悪に至る」等云々。

堅慧菩薩、宝性論に云わく「愚にして正法を信ぜず、邪見および憍慢、過去の謗法の障りあり。不了義に執著して供養・恭敬に著し、ただ邪法のみを見て善知識を遠離して、謗法の者に親近し、小乗の法に楽著す。かくのごとき等の衆生は、大乗を信ぜず。故に諸仏の法を謗ず。智者は応に怨家・蛇・火・毒・因陀羅の霹靂・刀杖・諸の悪獣・虎狼・師子等を畏るべからず。彼はただ能く命を断つのみにして、人をして畏るべき阿鼻獄に入らしむること

能わず。応に畏るべきは深法を謗ずると、および謗法の知識となり。決定して人をして畏るべき阿鼻獄に入らしむ。悪知識に近づいて、悪心にして仏の血を出だし、および父母を殺害し、諸の聖人の命を断ち、和合僧を破壊し、および諸の善根を断ずといえども、念を正法に繋くるをもって、能く彼の処を解脱せん。もしまた余人有って甚深の法を誹謗せば、彼の人は無量劫にも解脱を得べからず。もし人、衆生をしてかくのごとき法を覚信せしめば、彼はこれ我が父母、またこれ善知識なり。彼の人はこ

れ智者なり。如来の滅後に邪見・顛倒を廻して、正道に入らしむるをもっての故に、三宝清浄の信、菩提功徳の業あり」等云々。

竜樹菩薩、菩提資糧論に云わく「五無間の業を説きたもう乃至もし未解の深法において執著を起こさば○彼の前の五無間等の罪の聚まりをこれに比するに、百分にも及ばず」云々。

夫れ、賢人は安きに居て危うきを欲い、佞人は危うきに居て安きを欲う。大火は小水を畏怖し、大樹は小鳥に値って

枝を折らる。智人は恐怖すべし、大乗を謗ずるが故に。天親菩薩は舌を切らんと云い、馬鳴菩薩は頭を刎ねんと願い、吉蔵大師は身を肉橋となし、玄奘三蔵はこれを霊地に占い、不空三蔵は疑いを天竺に決し、伝教大師はこれを異域に求む。皆、上に挙ぐるところは経論を守護する故か。

今、日本国の八宗ならびに浄土・禅宗等の四衆、上は主上・上皇より、下は臣下・万民に至るまで、皆一人も無く弘法・慈覚・智証の三大師の末孫・檀越なり。円仁慈覚大師云わく「故に彼と異なり」。円珍智証大師云わく「華厳・法華

を大日経に望めば戯論となす」。空海弘法大師云わく「後に望めば戯論と作る」等云々。この三大師の意は、「法華経は已今当の諸経の中の第一なり。しかりといえども、大日経に相対すれば、戯論の法なり」等云々。この義、心有らん人、信を取るべきや不や。

今、日本国の諸人、悪象・悪馬・悪牛・悪狗・毒蛇・悪刺・懸岸・険岸・暴水・悪人・悪国・悪城・悪舎・悪妻・悪子・悪所従等よりも、これに超過しもって恐怖すべきこと百千万億倍なるは、持戒・邪見の高僧等なり。

問うて云わく、上に挙ぐるところの三大師を謗法と疑うか。叡山第二の円澄寂光大師・別当光定大師・安慧大楽大師・恵亮和尚・安然和尚・浄観僧都・檀那僧正・恵心先徳、これらの数百人、弘法の御弟子の実慧・真済・真雅等の数百人、ならびに八宗・十宗等の大師・先徳、日と日と、月と月と、星と星と、並び出でたるがごとし。既に四百余年を経歴するに、これらの人々、一人としてこの義を疑わず。汝、いかなる智をもってこれを難ずるや云々。

これらの意をもってこれを案ずるに、我が門家は、夜は

眠(ねむ)りを断(た)ち昼(ひる)は暇(いとま)を止(とど)めてこれを案(あん)ぜよ。一生空(いっしょうむな)しく過(す)ごして万歳悔(ばんざいく)ゆることなかれ。恐々謹言(きょうきょうきんげん)。

八月二十三日(はちがつにじゅうさんにち)

日蓮(にちれん)　花押(かおう)

富木殿(ときどの)

鵝目一結(がもくひとゆい)、給(たま)び候(そうら)い了(お)わんぬ。

志(こころざし)有(あ)らん諸人(しょにん)は、一処(いっしょ)に聚集(じゅじゅう)して御聴聞(ごちょうもん)あるべきか。